

ノミスの『ウクライナ諺集』におけるユダヤ人

近 藤 俊 介*

The Stereotype of Jews in “Ukrainian Proverbs” by M. Nomys

Shunsuke KONDO*

はじめに

ユダヤ人のウクライナへの移住が始まったのは紀元前4世紀のことである。彼等はクリミア半島や黒海沿岸のギリシア植民地を経て、ヴォルガ川、ドン川、ドニエプル川流域へと居住範囲を広げていった。11世紀頃にはドイツなど西ヨーロッパ出身のユダヤ人もウクライナへの移住を開始した。13～15世紀には、中央および西ヨーロッパのユダヤ人が東方のオーストリア、ハンガリー、ボヘミア、モラヴィア、ポーランド、オスマン帝国へと向かった。15世紀末になると、多数のユダヤ人がドイツやポーランドなどからリトアニア支配下のウクライナ領土内に流入し、16世紀末にはその移住がピークに達した。¹⁾

1569年の「ルブリンの合同」²⁾によって、ウクライナはポーランド領内に組み込まれるが、18世紀末の3度にわたるポーランド分割で、同地域は多数のユダヤ人住民とともにロシア領内に併合されることとなった。1897年の統計によると、ユダヤ人はヨーロッパ・ロシア地方の人口の3.4%を占め、これはロシア人(72.5%)、フィンランド人(6.6%)、ポーランド人(6.3%)、リトアニア人(3.9%)に次ぐ人口比率であった。³⁾その割合は、農村部と都市部を含めたウクライナ全土では8%、ドニエプル川以西の右岸地域では12.6%に達していた。農村部に居住することを禁じられていたユダヤ人は、ウクライナの都市人口の33%、右岸地域にある「ミステーチコ」⁴⁾居住者の70-80%を占めることとなった。⁵⁾こうして19世紀末までにウクライナは全世界のユダヤ人口の約3割を抱え込み、当時の世界で最もユダヤ人の密集する地域となったのである。⁶⁾

本稿では、まず編者ノミスとその『ウクライナ諺集』について概観した後に、同書に収められているユダヤ人に関する表現を、歴史的事実と照合しつつ解説し、19世紀中頃までのウクライナ人の意識におけるユダヤ人像を浮き彫りにすることを目指す。⁷⁾

なおテキストとしては、主に1993年の復刻版を使用した⁸⁾が、1864年の初版(ロシア・イルクーツク国立大学学術図書館所蔵)も一部参照した。⁸⁾

*外国語教室・非常勤講師 (Department of Foreign Languages)

ノミスについて

ノミスの生涯と業績、および諺の研究状況について、論者は既に別の場所で詳しく述べているので、ここでは簡単に触れるにとどめる。⁹⁾

ノミス (1823-1900)、本名シモノウ・マトヴィイ・テレンチヨヴィチは、ウクライナの民族学者、民俗学者、作家、教育者である。彼は1858年から実名とペンネームの両方で著作活動を開始し、自叙伝や『短編集』(1900)等を残した。¹⁰⁾その最大の業績は『ウクライナの話語など。O. マルコヴィチ他による俚言集。M. ノミス編』(1864)である。

この諺集は、多数の情報提供者によるウクライナ各地の諺の集大成という点で際立っている。ノミスはこの諺集に、各地で採録された民俗学的資料のほかに、ウクライナの著名な文学作品や雑誌などから多数の慣用表現や言い回しを引用し、最終的には約15,000の俚言と500の謎々を収録している。地理的に見ると、同書はキエフ、チェルニゴフ、ポルタワ、ポドリエ、ヴォルィニ、南ロシアの一部の地域を、また時代的には18世紀から19世紀中頃までの時期を網羅している。

『諺集』は、当時一般的だったアルファベット式配列ではなく、テーマ別分類方式をとっており、巻末には索引が設けられている。原文はウクライナ語の口語体で、訛りも含め発音された通りに表記されている。その内容は宗教、暦、民族、身分、貧富、善悪、真偽、喜怒哀楽、人柄、人体、職業、穀物、祝祭、動物など、当時の生活全般に及ぶが、教訓的な意味合いを持つものばかりでなく、日常会話において何気なく使われる表現や言い回しの断片なども含まれている。おのおのの表現には類似表現や異文(ヴァリエント)が詳細に表記されているほか、採録場所、採録者や作家の名前、文学作品や雑誌の書名などの出典を示す略号が付けられている。¹¹⁾

諺集の初版からは、権力を風刺したり神を冒瀆する内容の表現などが検閲により削除された。その後、ウクライナ語での出版を禁じたワルーエフ通達(1863年)や、ウクライナ語の使用を一切禁じたエムス法(1876年)の影響を受け、またソビエト政権下においてノミスが「ブルジョア的」との評価を受けていた等の事情により、諺集は1993年の復刻まで出版の機会に恵まれなかった。

では次に、このノミスによる『ウクライナ諺集』に収められているユダヤ人に関する表現について、信仰、職業、迫害と、大きく3つに分類して紹介していきたい。

信 仰

(1) 儀 式

ユダヤ教の祭日には新年祭、贖罪祭、仮庵の祭、律法の喜び祭、宮潔め(ハヌカー)祭、くじ(プリム)祭、過越の祭、七週祭などがある。これらユダヤ教の儀式はキリスト教徒であるウクライナ人の眼には珍妙なものに映った。

まず、仮庵の祭の様子は「スズメが隠れるのはフトイ [=アブラガヤ] の茂み、ユダヤ人が隠れるのはユダヤ式の茂み」(903)という駄洒落に反映されている。ユダヤ教徒はこの行事で、出

エジプト後の苦難に満ちた放浪生活を思い起こし、わらや木の枝でふいた粗末な仮小屋の中で1週間を過ごすことになっている。

また、殴打されることは「ユダヤのハマン〔あるいはハモン〕のように打たれる」(3956)と表現されるが、これはプリム祭のことを暗示している。この祭りでユダヤ教徒は、かつて自分たちを破滅させようとしたとされるペルシアの高官ハマンを呪うとともに、ハマンの姦計から自分たちを救い出した英雄を讃える。

安息日はユダヤ教では金曜の日没から土曜の日没と定められており、日曜日を安息日とするキリスト教よりも一足早く訪れる。この日ユダヤ教徒はすべての仕事を中断して、「家を締め切ってブツブツやる〔延々と神に祈りを捧げる〕」(898) ことになっていた。金曜の午後になるとユダヤ人たちはその準備のために慌しく動き回った。同様の光景は今日のイスラエルでも見られるようである。¹²⁾ 慌しそうにしている人のことは「安息日を前にしたユダヤ人」(11429) に譬えられた。また執拗にキスを交わすことも「安息日のユダヤ人のよう」(11856) だとされた。

ユダヤ人は安息日の間あらゆる仕事を中断しなければならなかったので、その分だけ請け負った仕事の遂行が遅れることもあり得た。またギリシア正教圏ではユリウス暦が、カトリック圏ではグレゴリオ暦が、またユダヤ教では太陰暦が適用されていたことから、相互の時間認識に誤差が生じることもあった。

「ユダヤ人の言う“すぐ！”」(5631) は、文字通りに理解してはならないとされた。なぜならそれは「モスクワの人々の言う“すぐ”」(853) や、「地主連中の“すぐ”」(8067) と同様に、待ちぼうけを食うことを意味したからである (853)。

狭い居住地区に閉じ込められ、同業者との熾烈な競争に晒されていたユダヤ人たちは、勤勉と職人技と機転で生き残りをはかる必要に迫られていた。¹³⁾ ユダヤ人手工業者が「夜なべをしてでも納期を守って」たとの記録もある。¹⁴⁾ 従って、ユダヤ人の請け負う仕事は「坊主の旅支度」(8066) と同様、つまり遅いとされているのは、ユダヤ人職人の怠惰のゆえというより、安息日あるいは暦の違いに由来する誤解と考えるのが妥当であろう。

ユダヤ人は何かにつけて儀式を重んじた。例えば「腹が減るとポーランド人なら歌をうたい、百姓なら上さんをぶん殴るが、ユダヤ人なら神に祈りを唱える」(12157) という具合であった。ユダヤ教式の誕生祝はキリスト教徒よりも厳粛な雰囲気で行われたようで、もったいぶっている人のことは「誕生〔あるいは出生〕祝いの席のユダヤ人」(2490) に譬えられた。

ユダヤ教徒は葬儀のあと8日間、喪に服して裸足で（あるいは靴下だけで）過ごす。フリンチェンコによれば、これは最後の審判を模して行われる儀式である。ここから裸足でいる人をからかって、「ユダヤ式の裸足の儀を執り行っている」(11234) といった。

埋葬方法について言えば、キリスト教徒の間では一般に土葬が行われていたのに対し、ユダヤ教徒の間には火葬の習慣が広まっていた。燃え盛る炎を見て、「ユダヤ人の魂でも燃えているのだろうか？」(9937) と言ったり、気温が高いときには「ああ、暑い！ユダヤ人を焼くこともできそうな程だ」(14044) などと言ったりした。

(2) 戒 律

ノミスは次のような小話を記録している。ある時ある所に金持ちでけちのユダヤ人が下男を1人雇っていた。この下男が何か食わせろとしつこくせがむので、ユダヤ人ははした金を与えて次のように言う。「さあ俵よ、お前さんにザリガニをやろう、たらふく詰め込んだら脱穀の仕事にとりかかるんだ」、または、「ほら、お前さんに金をやろう、ザリガニを買ってそのゆで汁を飲むがいい、ザリガニは売り払ってその金をよこすんだぞ」、「ほら、お前さんに卵をやる、腹一杯詰め込むがいい」(921)。

この小話の背景として、ユダヤ教の食事規定について知っておく必要がある。『旧約聖書』の細かい規定によれば、ザリガニはエビ、カニ、イカ、タコと並び、ヒゲやウロコのない魚であり、不浄な食物である。¹⁵⁾従って上の話は、単にユダヤ人の吝嗇さを言い表しているばかりでなく、自分にとって無価値なものに対しては気前が良いということをも意味しているのである。

同様に、ユダヤ人が「尻尾のない魚など俺に何の用がある？そんなもの下女にでも食わせるがいい！」(9866)と言った場合の、「尻尾を失った魚」も、ユダヤ人にとっては不浄な食物であり、価値のないものであったと思われる。

別の例ではユダヤ人が下女に向かって言う。「お前さんにはそんなにお給金をやれないよ、だってうちにはそんなに仕事は多くないんだからな。朝起きて家を掃除したら一休み、ゴミを運び出したら一休み、牛の乳絞りをしたら一休みという風に、休憩ばかりだ。俺の言いつけがすべて終わったら今度は飯だ。うまい御馳走を振る舞ってやろう。ジャガイモを茹でたらそのゆで汁はお前に、ザリガニを茹でたらその汁はお前に、卵を茹でたらその汁はお前にやろう。1度の飯に3品の料理では物足りないともいうのかい？小作人のためにこれ以上振る舞うところなど他にあるまい？」(14051)

ユダヤ教の食事規定ではミルクや乳製品と肉を混ぜてはならないとされている。牛乳、ジャガイモ、ザリガニ、卵を調理するにあたり、ユダヤ人が各作業の合間に「一休み」を入れたがるのも、これらの食物を混ぜないためである。また様々な食物を同じ器で茹でれば知らぬ間に戒律に触れる恐れがあり、その「ゆで汁」ばかりか「具」を下女に与えたとしても何ら不思議はない。

では、ユダヤ人が狼に食い殺された自分の山羊を見て「ああ山羊よ、ああ山羊！切り裂かれた方がいいが食物にはならん」(920)と言った場合はどうであろうか。

ユダヤ教においては、蹄が2つに別れていて消化のために反芻する獣(牛、羊、やぎ、鹿、かもしか、のろじか、野やぎ、くじか、おおじか、野ひつじなど)は食べてもよいが、それ以外の獣(らくだ、岩だぬき、野うさぎ、豚、馬など)は不浄の食べものとされる。ただし食べられる獣であっても、屠殺人によって喉を一気にかき切って殺されなければならず、そうでない場合は不浄の食物となる。上記の話でユダヤ人が悔しがっているのは、狼に噛み殺された山羊は食べるわけにはいかないからである。

他に関連する表現としては、「ユダヤ人も、カトリックに改宗したユダヤ教徒〔？〕も、我々

とは宗教が違う。水曜日に金曜日に乳清を食べた」(13457)がある。

(3) 聖書

罪を着せられている人のことを「ユダヤ人を前にしたキリスト」(4045)のようだと言ったが、このように聖書に基づくと思われる故事もある。

ユダヤ人は次の例のようにキリストの迫害者として描かれる。キリストがユダヤ人宅の家畜小屋の馬草に身を隠していた。彼は、馬草を食べないように馬に頼んだものの、馬は結局食べてしまった。こうしてキリストはユダヤ人に発見されることとなった。それ以来馬は呪いをかけられ、たくさんの餌を目の前にしても少ししか食べられずに、常に空腹のままだということになったという(318)。

次のような故事もある。キリストが十字架にかけられていた。ユダヤ人は彼がもう息絶えたものと思い、苦しめるのをやめた。そこへ雀が飛んできて「ジウージウージウ」とさえずり始めた。これはウクライナ語では「生きてる、生きてる、生きてる」という意味になる。するとユダヤ人どもは再び危害を加え始めた。それからというもの、雀を追い払うときには「ジウージウージウ」というようになった(10260)。

次も聖書に関するものである。「ユダヤ人どもはマンナを食べようとはしなかった。それなら悪魔にでも食わせてしまえ。それならネギでもかじっているがいい」(902)。この場合の「マンナ」とは、出エジプト後に砂漠を放浪中、天から降ってきたとされる白い食物である。これは食用になる地衣類で、直径4センチほどの小さな塊を成し、風に吹かれて長距離を移動する。¹⁶⁾ユダヤ教最大の祭日である過越の祭(ペサハ)では、荒野の生活を思い起こさせるような苦い草(マンナ)、種なしパン(マッツァー)、卵焼き、子羊などが食されるという。

(4) 改宗

ユダヤ教徒の中には、1648年のフメリニツキーの乱をはじめとする度重なる宗教迫害を逃れるために、キリスト教に改宗する者もいた。ニコライ一世(1796-1855)の治世には、ユダヤ人に対して積極的な改宗、同化政策がとられた。¹⁷⁾一般に、ユダヤ人が改宗するためには内務大臣の許可が必要とされた。¹⁸⁾

しかし彼らがキリスト教徒社会において信頼を勝ち得ることはなかった。「飼い馴らされた〔手懐けられた〕狼、頼み事の多い知人、養子に迎えた息子、キリスト教に改宗したユダヤ人、これらはいずれも信用ならない代物」(8101)とされ、同様に「仲直りした敵、キリスト教に改宗したユダヤ人、餌を十分に与えられた狼に関わると、ろくなことがない」(8102)とされていた。キリスト教徒の考えでは、そもそも「ユダヤ人の魂をキリスト教に改宗させることなど不可能」(13460)なのであった。なぜならば「ユダヤ人には永遠にユダヤ人の匂いがしみついて」(927)いたからである。所詮「不信心者はいつまでたっても不信心。不信心者は永遠に不信心」(896)でしかなかった。そればかりでなく、「ユダヤ人を改宗しろ、そうして首を切れ」(905)という表現が如実

に示しているように、ユダヤ人は改宗後においてもキリスト教徒の側からの迫害を免れ得なかったのである。

ユダヤ人は改宗した後でも、キリスト教徒にとっては異教的な火葬の習慣を捨てなかったらしいことは、「キリスト教への改宗者の墓〔土饅頭〕はひとつも見かけない」(928)という表現から推察することができる。

次の故事では対照的に、キリスト教徒のユダヤ教への改宗が試みられている。要約すると次のようになる。ユダヤ人たちがキリスト教徒イワンをユダヤ教に改宗させようと考え、ご馳走を振舞っておいてユダヤ教会¹⁹⁾に一晚閉じ込めておいた。翌朝、何があったかとたずねられると、イワンはとても恐ろしいことがあったと答える。それによると、イエス・キリストとユダヤの神様が現れて彼の奪い合いを始め、ユダヤの神様がキリストを張り倒したという。それを聞いたユダヤ人は大喜びして得意がるが、結局はキリストがユダヤの神様を負かしたのだと知ると、ユダヤ人はひどく落胆して自分たちの神を口汚く罵る(内心“くそ食らえ”と思う)。恥じ入ったユダヤ人たちは、こめかみに髪の毛の房を残して頭を剃ることにしたが、禿げ頭のままでいるのは嫌なので、フェルト帽を編んで被ることにした。以来、ユダヤ人どもは頭を剃ってフェルト帽を被っているという(890)。

ここではユダヤ人がこめかみから延ばしている垂れ髪(ペイシ)や独特のフェルト帽(キツパー)について、滑稽にその由来が説明されている。しかし神を冒瀆するような内容のゆえ、この小話は初版から検閲により削除された。なおユダヤ教の伝統的衣装を着ることや、男性が垂れ髪を伸ばすこと、また女性が結婚前に頭を剃るなどの習慣は、ニコライ一世により禁止された。²⁰⁾

(5) 邪 教

ユダヤ教徒はキリスト教徒に対立するものとして理解されていた。ユダヤ教は「犬の信仰！」(887)とされ、また「ユダヤ人とポーランド人と犬の信仰は一緒」「カトリック教徒とユダヤ人は同じ穴の貉」「ユダヤ人なら、すなわち犬」(8098)、「ユダヤ人、ポーランド地主、ドイツ人、奴らはすべてを台無しにする」(13458)などとも言われた。フメリニツキーの時代のあるコサックは、カトリック司祭とユダヤ人と犬とを縛り首にして、「カトリック司祭、ユダヤ人、犬、これらの信仰はみな同じ」(8099)と書き残したとされる。

ユダヤ人と悪魔との関連もたびたび指摘される。ユダヤ人は「ユダヤの悪魔め！」(893)などと罵倒されるばかりか、「悪魔とユダヤ人は血のつながった兄弟」(8098)とさえ言われた。このほか「悪魔がユダヤ人をさらっていくように連れていく」(3998)とか、「悪魔がユダヤ人をさらうように連れ去った」(13514)などの表現がある。

ウクライナの人々にとって、ギリシア正教徒以外の信者はすべて「邪教徒」(894)であった。しかし信仰心さえ持たない者は「ユダヤ人〔あるいはトルコ人〕以下」(2)とされた。そればかりか「不信心者と犬は同じ穴の貉」(8100)であった。

その一方で、ユダヤ人の信仰心の厚さは尊敬に値するものであり、敬虔な人は「巡礼のユダヤ

人」(173) のようであるとか、「ユダヤ人ほど信仰の強い者はない」(897) などと言われた。

(6) そ の 他

ユダヤ人の間でキリスト教徒は「愚かなホイ（ゴイ）」(926) と呼ばれ、軽蔑された。フリンチェンコによると、「ホイ」には「不信心者」とともに「愚か者」の意義があり、賢い人のことを「頭の中にホイが宿っていない」(6251) 人だといった。

ユダヤ教の信仰に関してはこのほかにも、「ユダヤ人曰く、十字架は壊すべからず直すべからず」(899)、「もしユダヤ人が天から来たのなら、奴に神を信じる必要などない」(911)、「ラビ（＝ユダヤ教牧師）は死んだが、本〔聖書またはタルムード？〕は残った」(918)、「勇敢なユダヤ人は学校でも罪をおかす〔？〕」(919) などの表現もある。

職 業

(1) 管 理 人

ユダヤ人は、シュラフタ階級（ポーランド領主）によるアレンダ（借地）制のもと、ポーランド支配下のウクライナで領地管理人や徴税代理人、旅籠経営者、あるいは「使い走り」(10688) として住みついていた。両者の結びつきは強く、「水のなかには必ず悪魔が住みついているように、大地主のもとにはかならずユダヤ人が住みついて」おり、また「悪魔の住みついていない沼地があり得ないのと同様、ユダヤ人の住みついていないような地主も考えられない」(1226) ほどであった。搾取する一方である「ユダヤ人と地主の財産は、決して減ることがない」(917) のが現状であった。こうして人々の間には、「地主の元に3年勤め、ユダヤ人の所で3年働いたような裏切り者は「縛り首にするに限る」(10397) といった考えが芽生えていった。「しよせん地主は地主、百姓〔つまり自分たちウクライナ人：訳注〕は百姓、ユダヤ人はユダヤ人でしかない」(9440) という表現からも、これら3者間に横たわる超えがたい溝が感じられる。

ユダヤ人が社会において占める位置、あるいは強弱関係は、次のように示される。「柳は山羊に食い千切られ、山羊は狼に襲われ、狼は百姓に退治され、百姓は地主に虐げられ、地主は弁護士に訴えられ、弁護士は300匹の悪魔に懲らしめられる。…百姓はユダヤ人に、ユダヤ人は地主に、地主は弁護士に、弁護士は悪魔に苦しめられる。ユダヤ人は地主に、地主は弁護士に、弁護士は300〔匹の悪魔に〕やっつけられる。柳は山羊に食われ、山羊は狼に食われる」(8074)。ここで、ユダヤ人は百姓と地主との間に位置づけられている。なお、柳は悪魔の宿る不吉な木と信じられていることから、²¹⁾全体として強弱関係の構造は一巡していることになる。

(2) 居 酒 屋

既に15世紀末のポーランド領ウクライナにおいて、醸造業は貴族階級の独占的職業となっていた。国王の許可を得て自らの領地内で行う居酒屋経営は、王や地主階級にとって重要な収入源であるとともに、農民への賃金支払いの代替手段としても利用された。18世紀の記録によれば、農

民は自分の属する荘園領主から一定量の酒を買う義務さえ負っていた。醸造業は余剰穀物の処理方法としても、その収益性の高さゆえに活用された。²²⁾

ところで、当時のポーランド人は「鶏肉をむさぼる人 куркойд」の異名を持っていた。²³⁾「ポーランドのビールは美味しい」(11624)という表現からも容易に想像がつくように、ポーランドの中小貴族階級シュラフタは美食家、食通、食道楽として知られていた。シュラフタはマグナート(ポーランドの大貴族)を模倣して、「借りろ、そして奢れ」といった贅沢な生活を送り、宴会では「高価な香辛料をふんだんに使用した大量の料理や浴びるほどのビールやワインなどが供された」という。²⁴⁾

こうしてポーランドで育まれた豊かな食文化は、ポーランド領主から借り上げた土地で居酒屋や宿を経営していたユダヤ人らを経て、ウクライナに伝えられることとなった。

1872年には、ウクライナにおけるアルコール醸造業の約90%、製材業の56%、タバコ製造業の48%、製糖業の33%が、裕福なユダヤ人に占められていた。²⁵⁾

このような事情を反映して、諺においてユダヤ人は「居酒屋」と同義語になっている。「困ったことになった時、我々はユダヤ人の所に行く」(923)とは、憂さ晴らしに居酒屋に駆け込むことを意味した。「困った時の神頼み」の代わりに、「困った時のユダヤ人頼み」(924)と言われた。苦境に立たされた人にとって最後の頼みの綱がユダヤ人であったらしいことは、「その程度のお情けなら、俺はユダヤ人からでも頂戴してみせる」(4768)という表現からも推察される。

しかし、ユダヤ人は人々に感謝されるどころか「一難去ったら、ユダヤ人め、悪魔にさらわれるがいい」(924)などと思っていた。また「困ったときはユダヤ人の所に行かず、隣近所に相談しろ」(9489)とも戒められていた。ユダヤ人に対する民衆のこのような不満は、フメリニツキーの乱や、後に頻発する pogrom という形で表面化した。

このように人の不幸に付け込んで金儲けをするユダヤ人は、「人を騙すことで暮らしていて、我々から金を搾り取っているだけ」(885)と、人々に理解されていた。「ユダヤ人と居酒屋の上さんは〔客を〕帰らせようと」(11660)はせず、富は貪欲なユダヤ人の手元に集中する一方であった。ユダヤ人の所有する富については、「蚤持ちのユダヤ人みたいに金持ち」(1489)とか、「ユダヤ人の所にあるようなお金。……虱」(1345)のように、蚤や虱の数にも関連付けられた。物持ちとしてのユダヤ人は次の故事にも現れている。

マニ（あるいはマニ、マリ、メニ）という名のユダヤ人が梨を失敬しようとして捕まり、拳固をたっぷり頂戴してから柵の外に放り出された。それ以来、懷や床下などに何かを大量にため込んでいる人について「梨を失敬しようとしたマイみたいに、しこたまため込んだ」(7689)と言うようになった。

しかし、「貧しいユダヤ人、痩せた豚、酔どれの女ほど嫌なものはない」(13913)という表現にもあるように、ユダヤ人のなかには成功して富を築く者もある一方で、大多数のユダヤ人は一般のウクライナ人と同様、貧困層に属していたというのが実情であった。

なお「俺の手元にある金額はユダヤ人の飼う豚ほど」(1484)とは、ユダヤ人が不浄な生き物と

される豚を飼育することはありえないことから、「まったく金がない」の意味になる。これ以外にもユダヤ人と居酒屋との関連を示す表現がいくつか見られる（925, 10595, 11554）。

（3）商 人

ウクライナのユダヤ人は、土地所有を必要とする農業から締め出され、その定住地域²⁶⁾も限定されていた。その結果、彼等のほとんど（全ユダヤ人口の4分の3）は農民ではなく、小売業者、仕立て屋、靴職人、宝石商などの中間層を構成することとなった。²⁷⁾

ところで、ロシア帝国領内での自由な居住権を持たないユダヤ人が定住地域から外出を許される期間は、遺産相続や商用などの合法的目的に限り6週間まで（なお最大2ヶ月の期間延長つき）とされていた。また馬車運送業に従事する者は2週間以内、高額納税者で資本家の第1級（ギルド）商人ならば年に6ヶ月以内、それに次ぐ第2級（ギルド）商人の場合は2ヶ月以内と定められていた。²⁸⁾

商売はこのように、定住地域外に出ることを厳しく制限されていたユダヤ人が外部の世界、特に他のユダヤ人共同体と接触を保つための、数少ない機会のひとつとなっていた。世界各地に離散して暮らすユダヤ人たちのアイデンティティ保持のためにも、商売は重要な役割を果たしたといえる。²⁹⁾

ユダヤ人は定期市において欠かせない存在であり、「ユダヤ人の姿を見かけないような市場などあり得」（10494）ず、同様に「ユダヤ人の1人もいないような定期市などあるだろうか？」（915）とさえ言われるほどだった。「ユダヤ人が1人でもいれば定期市」（916）になったのである。また、「定期市のユダヤ人みたいに色めき立つ。ユダヤ人が金に飛びつくみたいにわくわくする。糞を踏んづけたユダヤ人みたいに飛び上がって喜ぶ」（4376）などの表現に示されているように、定期市とユダヤ人とは不可分の関係にあった。³⁰⁾

ユダヤ人の商才は、次のようにしばしば女性の商売上手と比較されている。「ユダヤ人がいなくても、女が2、3人集まれば、定期市は行われ」（9087）た。また定期市を切り盛りしているのは、結局は「2人のユダヤ人と2人の女、あるいは3人の女と2人のユダヤ人」（8103）であるとされた。なお、女性と市場の関係については、「2人の女とガチョウがあれば市が立つ」（9083）とか、「女2人集まれば商い、3人集まれば定期市」（9084）、「女7人集まれば定期“前夜市”。女7人集まれば商い成り立つ」（9085）などと言われた。

ユダヤ人と商売との密接な関係は、例えば「生活は兄弟流に、商売はユダヤ人流に」（9711）とか、「兄弟のように愛し合おう、だが勘定はユダヤ人のように済ませよう」（9712）、また「ユダヤ人の勘定みたいに正確だ。書き留めるのは1度だけ、確かめるのは決まって2度3度」（13829）などの言いまわしにも現れている。

ユダヤ人は農村部に移住することを当時の政府により禁止されていたため、農耕に従事することは事実上不可能な状況にあった。しかしこのことがかえってキリスト教徒の反感を招いた。人々の考えでは「ユダヤ人は種まきもせず、耕しもせずに、人々を騙すことで暮らしを立てている」

(910) のだと思われた。

様々な職業から締め出されたユダヤ人は、「ペテンでもしないかぎり食べていけない」(912) 苦境にまで追いやられたことも考えられる。「ユダヤ人が商っているのはまともな品物ではなく、まがい物」(10519) であるというのが、当時の人々の一般的な理解であった。このように嘘をつき続けるユダヤ人は、「そうでもしないと喉がつまる」(913) のだろうと説明された。眉唾物の話は「ユダヤ人のするような話」(13809) に譬えられている。

ユダヤ人が嘘をつく理由は、しばしば彼らの宗教や儀式にも帰せられている。ウクライナ人の理解できないイディッシュ語を使用することで、密かに「ユダヤ人は祈りながらも人を騙す方法を学んでいる」(914) のではないか、との疑念を人々は抱いた。ラビ（ユダヤ教指導者）でさえ説教の中で法螺話をしているものと考えられていた（6909）。このほかにも「誕生祝の席でのユダヤ人のように、嘘まみれ」(909) などという表現も見られる。

（４）識 者

「ソロモンの栄華」やエルサレム神殿建設などで知られる古代イスラエル王ソロモン（生年不詳～前928年没）は、『箴言』や『伝道の書』を著したとされることから、「智者」の代名詞となった。ここから聡明な人のことを「ソロモンの靴のように賢い」、あるいは「ユダヤ人の靴のように賢い」(6242) などと表現した。賢明さについてはユダヤ人の名前やその職業との関連においても指摘され、「ベルコのズボンのように賢い」、あるいは「ベルコの子牛のように賢い」(6241)、「モシコが酒造用の香味料によく通じているように詳しい」(6512)、「ユダヤ人がホップに詳しいように、その道の通人だ」(6519) などといわれた。

迫 害

（１）罵 言

ユダヤ人は、「犬の信仰」「犬の子孫」「犬の一族」「犬の倅」「犬の息子」(887)、「ユダヤの悪魔」(893)、「邪教徒」(894)、「ヘロデの子孫」(895)、「ユダヤの災難」(908)などと罵倒された。なお「ヘロデ」とは、恐怖政治を行ったユダヤ王（前73頃～後4年）で、幼児の大量虐殺を行い、病的猜疑心から妻や実子をも処刑したことから、「暴君」「悪党」「悪魔」の代名詞となっている。³¹⁾

罵言の中では、「ユダヤ人め、ユダヤ人、豚の耳め」(886)のように、ユダヤ教で不浄な生物とされている動物への意図的な言及もあった。³²⁾

この他にも「ユダヤ人よ、ユダヤ人、お前など消え失せてしまえ！」(13459)とか、「ユダヤ人よ、ユダヤ人！ 帰ってマラリアに罹るがいい」(892)などと罵られた。

（２）不 潔 さ

「ユダヤ人に触って面を汚すな」、また「ユダヤ人に係わるな、ひどく穢れているから」(904)とされていたように、宗教的な意味で「穢れている」ユダヤ人との接触は戒められていた。それ

とともに、「ユダヤ人は悪臭〔ただし原文伏字〕と蛆だらけ」（888）、また「ユダヤ人のように泥だらけ」（11273）などとされ、物理的な不潔さもユダヤ人に譬えられた。³³⁾同じことを反語的に表現すると「ユダヤ人の靴のように清潔」（11272）となる。

フリンチェンコによれば、「疥癬、かさぶた、吹き出物〔парх〕」はユダヤ人の蔑称でもあり、ガリツィア地方には「ユダヤ人たちは臭いウズラを食べていらい疥癬になった」との言い伝えがある。³⁴⁾表面が何かに覆われている様子は、「ユダヤ人の疥癬」（13860）に譬えられた。喜ぶ様子は「ユダヤ人が疥癬を搔いているようだ」（2596）と言い表された。³⁵⁾

このほか、教会やラビを中心として独特の集団を形成しているユダヤ人たちの様子は、雌のまわりに群がる発情期の雄犬を連想させた（900）。

（3）迫 害

ウクライナにおけるユダヤ人迫害の歴史は古く、17世紀中頃の「フメリニツキーの乱」³⁶⁾に始まり、18世紀の一連の「ハイダマキ」³⁷⁾、特にそのピークである1768年の「コリイフシチナ」³⁸⁾を経て、1881年以降にウクライナで度々起きた「ポグロム」³⁹⁾へと引き継がれていく。1864年という時期に出版されたノミスの諺集には、このポグロム以前の社会の不穏な空気が反映されている。

1785-6年にロシアの歴史家、軍人、地形学者のリヘリマン（1720-1789）⁴⁰⁾は、コリイフシチナについて同時代人の視点から記録を残している。それによれば、ユダヤ人は名門シュラフタ、城の召使、役人、カトリック司祭とともに、コサックらにより虐殺され、彼等の身内の女子供も容赦はされなかった。財産は没収され、カトリック寺院は火を放たれて破壊され、シュラフタの屋敷や城、ユダヤ人の家は略奪された。この混乱の中で自らの手を血で染めず、戦利品を手にしなかったものはいなかったほどであったという。⁴¹⁾

ノミスの諺集に収められている表現は、このコリイフシチナの様子を懐古したものである。ポーランド人とユダヤ人は、「ちょうど小麦から毒麦がより分け」（906）られるように、社会の有害分子として駆除されなければならなかった。イワン・ゴンタの時代には、ユダヤ人を「垣根の杭に吊るし上げ」（672）、ポーランド兵ともども皆殺しにしたものだった（873）。ユダヤ人を殺すことは善行でさえあり、「ユダヤ人を1人殺すたびに、魂は40の罪から解放される」（907）と信じられていた。

一方、迫害の対象となったユダヤ人は、「丸太の足枷につながれたユダヤ人ベルコのように堂々としている」（2474）場合もあったが、その多くは「道端の切り株を盗賊と見間違えておびえる」（4357）ほどの小心者であった。臆病な人は、「キリストに震え上がるユダヤ人」（4371）にも譬えられた。それは反語的に「ユダヤ人のように大胆だ」（4335）とか、「倒れた白樺の頂によじ登ったり、門の向こうから犬をけしかけたりするユダヤ人ヨシと同じくらい」（4358）大胆だ、などとも表現された。

ユダヤ人の見せかけの勇敢さについては次のような小話がある。ある男がユダヤ人に、どこへ行くのかとたずねる。するとユダヤ人は戦に向かうのだと言う。どうして今さらと聞くと、まだ

敵を殺せるかもしれないからだと答える。自分が殺されてもいいのかと問いただすと、人から恨みを買うようなことは何もしてないから大丈夫だと言う (4359)。こうしてユダヤ人の「勇敢さ」は、単なる愚かさに過ぎないことが露呈する。

そ の 他

これ以外にも「ユダヤ人がうろつくと雨になる」(308)といった迷信や、「村人1人につきユダヤ人7人〔?〕」(901)のような表現、そして次のような小話がある。

ある者が「牛乳の中に入っていた雀は素晴らしかった」と自慢話を始めると、別の者が「お前が食ったのか?」と問いただす。すると「とんでもない、ユダヤ人たちがそれを食べているのを、ツインパロ奏者が穴から覗いたと、コントラバス奏者が言っていたのだ」(7809)と答える。これは事件をいちいちふれまわる人のことをからかったものだという。

お わ り に

以上のように、ノミスのウクライナ諺集には、キリスト教徒であるウクライナ人にとって、ユダヤ教の仮庵の祭、プリム祭、安息日、そして生と死にまつわる儀式等の宗教行事の様子が物珍しく、滑稽でさえあったこと、また両者の間には暦や戒律の違いに由来する誤解も生じたこと、ユダヤ教徒は邪教徒としてしばしば悪魔や犬と結び付けられ、たとえキリスト教へ改宗した場合でもウクライナの地域住民の信頼を勝ち得ることはなかったこと、などが反映されているといえよう。

ウクライナ農民の保護という目的で、農村部への移住を禁止され都市部の定住地域に集められていたユダヤ人は、地主のもとで管理人や居酒屋、あるいは商人や手工業者として生計を立てることを余儀なくされていた。しかし彼らが畑仕事を免れているという事実は、かえって農民の不満を買うこととなり、地主と農民との間の中間搾取者として、地域住民の憎悪の対象ともなっていた。このような経緯も、同諺集からは読み取ることができる。

最後に、ノミスと同時期の資料である、アダルベルグのポーランド諺集(東京外国語大学所蔵)や、チェラコフスキイのチェコおよびスラブ諺集(一橋大学所蔵)にも、ユダヤ人に関する表現が多数収録されている。これらの比較は今後の課題としたい。⁴²⁾

資 料

2. Невірний гірш Жида, або Турка. *Проскурів*.
173. Набожний—як Жид подорожний. *Брацлавщина, Сквіра*.
308. Буде дождь, бо Жиди волочачця. *Илькевич Г.С.*
318. Коні тим багато, а воли трохи ідять, що як ховав ся Христос в яслах од Жидівъ, то воли сіна не іли, що він ним вкрився, а коні ззіли : Жиди знайшли Христа, а він за те прокляв коней (щоб іли цілий вік и все голодні стояли). *Основа 10 (XVI, 52)*. [検閲削除]
672. Прославився на Україні ще козак и Гонта, що сажав Жидів на кілля рядом поверх плота. *Васильківщина*.

853. Московський час, як жидівський зараз. *Білгородщина?* /—як и жидівський—не переважаєш. *Гатиук М.О.*

873. Тих куркоідів, як Жидів, не жили. *Чорноморія.*

883. Мужик нігде не змерзне, як в груди, Жид в п'яти, а Лях в вуса. *Збірсьов Лазаревського В.*

884. Мошродзеї. *Основа 2 (XX, 93).*

885. Жид брехнею живе, все з нас тягне. *Основа 2 (189).*

886. Жиде-Жиде, свине (свиняче ; *Лубеничина*) ухо. *Г(р)айворінічина.*

887. Псявіра (на Жида більше)! *Куліш П.О., Г(р)айворінічина.* — Псяюхо! *Куліш П.О.* — Піюха! *Г(р)айворінічина.* — Пій син! *Г(р)айворінічина.* — Собачий син! *Пирятинщина, Лубеничина.*

888. Жид-Яврей, повна с···* а червей. *Лубеничина, Білгородщина?* [*сморду]

889. Жид-Жид катилик, загубив черевик, а я йшов та й найшов, та нас ···* та й пішов. *Номис М. [*?]*

890. Наш Бог, наше й г···но*. *Номис М. / Кепкують з жидів.* Ніби жиди якогось чоловіка на свою віру хотіли повернути, и щоб краще до неї брався, нагодували добре, замкнули на ніч в кагалі. Ну, замкнули, — звісно, чоловік наївся добре··· Приходять на другий день жиди : “А що се ти, Іванче?” — “Та тут”, каже, таке було, що и крий мати Божа! — Як прийшов наш Бог и як почне мене світити, що я од віри одвертаюсь··· Коли де не візьмись и ваш, и як зтілись за мене! А далі и в руки··· И як стусоне ваш Бог нашого···” — “Бац бац, яки й наш Бог!” — “А вже ж! ще! пак! а далі як стусоне и наш вашого!” — “Ну, и що зе нас Бог?” — “А хіба ж не бачите, що?” — “Та ти мозе, бресес, Іванце” — “А що мені брехати! хіба вони мені що!” От тоді жиди с обі на голови “наш”, мов, “Бог···” Як же випустили Івана з кагали и розказав він усім : жиди волося собі стригти··· тільки на висках позоставляли ; а щоб не ходити голомозими, яломків понашивали. З того часу, кажуть, вони почали собі голови вистригати и яломки носить ; а то, кажуть, ходили вони в чубах, як и всі [検閲削除/ *гівно]

892. Жиди, Жиди! Верніцца, та візьми свою тітку (лихоманку ; кричать на проізжачих Жидів). *Радомисль.*

893. Гаспидська Жидова. *Куліш П.О.*

894. Недовірок. *Конотінічина.*

895. Иродове кодро. *Куліш П.О.*

896. Невіра невірою й буде. *Каменецький Д.С.* — Невіра завжди невіра. *Пирятинщина.*

897. Над Жида нема кріпшого в вірі. *Місце невідоме, Єфименко П.С.*

898. Жид хату закладає, то моркотить (Богу все молишся). *Проскурів.*

899. Жид мовить : “Хрест не зопсуєть, ні направить”. *Старий Збірник.*

900. Жидів, як собак. *Лубеничина, Новгород-Сіверщина.*

901. Усякому мирянину по семеро Жидовинів. *Місце невідоме.*

902. Не хотіли Жиди їсти манну—найже зідять дідька. *Ількевич Г.С./манни—нехай же їдять цибулю. Канівщина, Київ.*

903. Горобці в очерет, а жиди в кучки. *Ніжинщина, Конотінічина.*

904. Не займай Жида (гида ; *Ведмежа*), не каляй вида. *Звенігородщина, Немирів, Канівщина, Київ.* — Не зачіпай Жида, бо велика (готова ; *Ількевич Г.С.*) огида. *Проскурів.*

905. Жида перехрести, та и голову одотни. *Глухівщина.*

906. Кукіль з пшениці вибирати, Жидів и Ляхів різати. *Білозерський М.М.*

907. Жида вбий—сорок гріхів з душі. *Місце невідоме.*

908. То жидівська напасть. *Проскурів, Лубеничина.*

909. Як у Жидів родини, то нема правдини. *Місце невідоме.*

910. Жид ні сє, ні оре, а обманом жие. *Проскурів.*

911. Жеби Жид був з неба, вірити му не треба. *Ількевич Г.С.*

912. Жид, як не обшукає, то навет и не пообідає. *Брацлавщина?*
913. Жид, як не збреше (не обманить ; *Звенігородщина*), то удавиця. *Бердичів, Зінківщина?*
914. Жид, и молячи, вчиця обманути. *Илькевич Г.С.*
915. Без єдного ж Жида ярмарка буває? *Єфименко П.С.*
916. Про (По ; *Новосільський А. "Люд український" 1857*) одного Жида ярмарок (ярмалок) буде. *Проскурів.*
917. Жидівське а панське не пропаде. *Илькевич Г.С., Проскурів, Радомисль.*
918. Рабин умер, а книжка зосталась. *Новосільський А. "Люд український" 1857*
919. Одважний Жид и в школі грішить (бз...ть* ; *Залюбовський Г.А.*). *Радомисль, Пирятинщина. [*?]*
920. Ай коза, ай коза! Хоч розорвалась, та не подалась. (Жид казав, стоячи над своєю козою, що вовки розірвали). *Новгород-Сіверщина.*
921. На тобі, сину (Возьми собі, наймиточку ; *Поділля*), рака, набухайся та молоти. *Галиція.* — На тобі гріш, купи рака, звари, та юшку иззіж, а рака продай, а мені гріш виддай (або : На тобі яйце та набухайся добре). *Єфименко П.С. / Був собі Жид багатий та скупий, мав він парубка. Той парубок докучав ему істи, а Жид дає шага та й каже... Єфименко П.С.*
922. Як біда, ми до Жида. *Новосільський А. "Люд український" 1857 / Докір тому, що при лихові вдається до шинку.*
923. Як біда, то до Жида, а як мине біда—най дідько бере Жида. / Мені доводилось чувати, що таксь кепкують над Жидами : ніби то якийсь з них так сказав замість "як біда, то до Бога и д." *Номис М.*
924. Способом, способом, дванадцять Жидів насилу корець хмелю витаскали на гору. *Проскурів.*
925. Дурний гой (невіра ; жидівське). *Проскурів.*
926. Жид Жидом завжди смердить (про перехристів). *Місце невідоме.*
927. Ні одного перехриста могилки не видно. *Носович І.І.*
928. Не робив ЖИД на хліб, та и ЦИГАН не буде. *Илькевич Г.С.*
1226. Як у воді не без чорта, так у великого пана не без Жида. *Записки о Южной Руси (1 : 146), Канівщина, Переяслівщина.* — Як у болоті без чорта, так у пана без Жида не буває. *Білгородщина?*
1345. Грошей, як у Жида. *Лубенищина, Пирятинщина, Ніжинщина, Білгородщина? / — ... вошей. Новосільський А. "Люд український" 1857.*
1484. У мене стільки грошей, як у Жида свиней. *Місце невідоме.*
1489. Богатий, як Жид на блохи. *Проскурів.*
2474. Запишався (Бімбус. *Збір слов Шейковского "Опыт южнорусского словаря" 1861 ; Бач як помпе. Сквіра ; Се так чваниця. Брацлавщина*), як (як наче) Берко в колоді. *Сквіра.*
2490. Завеличався, як Жид на родинах. *Старий Збірник.*
2596. Тішиця (Цяцькаєця. *Єфименко П.С.*), як Жид паршами (пархами. *Єфименко П.С., Илькевич Г.С.). Канівщина, Київ.*
3956. Б'ють, так як жидівського Гамана. *Проскурів. / — ... як Гамона. Старий Збірник.*
3998. Тащить, як чорт Жида. *Проскурів.*
4045. Виноватий як Христос перед Жидами. *Пирятинщина, Остерщина.*
4335. Сміливий, як Жид. *Місце невідоме.*
4357. Що один, то один, а що два, то два : два завше не один. *Брацлавщина? / Казав Жид, надівши яломок собі на коліно — побачив пеняка біля дороги и думав, що розбійник...*
4358. Есь смілий : на лежачу березу в сам верх зліз. *Новосільський А. "Люд український" 1857.* — Сміливий Есь : крізь засувку гуджа (цькує). *Єфименко П.С.*
4359. Куди ікеш, Жидку? — На войну! — Чого ж так не рано? — Може, ще хоч одного убью. — А як тебе хто вб'є? — Хіба я ему що винен! *Звенігородщина, Радомисль, Брацлавщина?*

4371. Опе жахаєця, як Жид Христа. *Звенігородщина, Пирятинщина.*
4376. Трусиця, як Жид над грішми (на ярморці. *Кулжинський Г.*; на г···і* *Хоролицина*). *Конотіщина, Брацлавіщина?* [*гівні]
4768. Сей ласки я и в Жида дістану. *Литовець.*
5631. Жидівський зараз! *Зіньківщина?*
6241. Розумний, як Беркови штани. *Шейковський "Опыт южнорусского словаря" 1861, Брацлавіщина? Остерщина.* —··· як Беркове теля. *Кролевещина.*
6242. Розумний, як Соломонів патинок. *Брацлавіщина?*— Як жидівський патинок. *Слободи=південна сторона України.*
6251. Нема го́я в голові. *Основа. II (XVIII, 40).*
6512. Розумієця, як Мошко на перці. *Проскурів.*
6519. Зна вскус, як Жид у солоді. *Місце невідоме.*
6909. Цитте, Жиди, нехай рабан бреше! *Сківра.*
7689. Набравсь (Наївся. *Радомисьль, Зіньківщина?*; Допався··· до. *Г(р)айворініщина.*), як Май (Мень. *Радомисьль*; Мань. *Старий Збірник*; Маль. *Г(р)айворініщина.*) груш. *Звенігородщина, Луєнщина, Єфименко П.С., Брацлавіщина? Бердичів.*— Мань був Жидок, хотів груш накрасти; чоловік піймав его, вибив и викинув за тин. *Данилевич.* "Набравсь, як Май груш" кажуть, як хто набере чого багато и за пазуху, и в полу и д. *Лубенищина, Бердичів, Май, кажуть, такий чоловік був. Зіньківщина?*
7809. А добрі горобці в молоці! —Чи ти ж ів?— Ба, ні! козав басистий, що бачив цимбалистий, через дірочку як Жиди іли! (Про тих, що кожну новинку хвалять). *Конотіщина, Київ.*
7919. Що дід, а що Жид, а що й Запорожський козак. *Максимович М.О.*
8066. Попівське вибраня, а жидівське зараз, то все єдно. *Проскурів.*
8067. Панський сейчас, як жидівський зараз. *Остерщина.*—Жидівський зараз, а панський почекай. *Радомисьль.*—*Сейчас, як жидівський зараз. Новгород-Сіверщина.*
8074. Дере коза лозу, а вовк козу, а вовка мужик, а мужика пан, а пана юриста, а юристу чортів триста. *Правобочна Україна.*— ··· а мужика Жид, а Жида пан, а пана юриста, а юристу чорт. *Єфименко П.С.* — Пан дере з Жида, з пана юриста, а з юристи — по триста. — Дере коза лозу, а вовк козу. *Канівщина, Київ.*
8098. Що чорт, що Жид (Що Жид, що лях. *Проскурів*), то рідні брати. *Радомисьль.*— Жид, Лях и собака — все віра однака. *Бердичів, Прилука.* — Католик и Жид, то все єдно. *Проскурів.*— Що Жид, то пес.
8099. Ксендз, Жид та собака —усе віра однака. *Костомаров М.І.* / Кажуть, один гайдамака, за Хмельницького, повісив над вівтарем ксендза, Жида и собаку и отакий напис зробив.
8100. Невіра и собака—то єдна присмака. *Проскурів.*
8101. Вовк хований (з рук вигодований), приятель перепрошений, син прибраний, а Жид хрещений, то все не певні. *Ількевич Г.С.*
8102. З ворога примиреного, з Жида хрищеного, з вовка годованого добра не буде! *Білозерський В.*
8103. Два Жиди и дві невісті зроблять ярмалок на місці. *Ількевич Г.С.* — Три баби а два Жиди зроблять ярмалок. *Каменецький Д.С.*
9087. Без одного Жида (Як збереця жіноти дві-три; Коли б одного Жида вмішать, то й. *Сківра.*) ярмарок буде. *Канівщина.*— Коли б єдин Жид, то був би ярмарок. *Брацлавіщина?*
9440. Звичайне тримає: як пан за паном, мужик за мужиком, а Жид за Жидом. *Проскурів.*
9489. Коли біда, не йди до Жида— лише до сусіда. *Ількевич Г.С.*
9711. Живи за брата, а торгуйся за Жида. *Лубенищина, Харківське видання.*
9712. Любімося (Жиймо. *Брацлавіщина? Бердичів, Радомисьль, Єфименко П.С.*; Живімо. *Білгородщина; Живи. Старий Збірник*), як брати (Браття. *Брацлавіщина? Бердичів*; люде. *Білгородщина*; брат за брата.), а

рахуймося, як Жиди. *Илькевич Г.С.*

9866. Як той Жид казав : “нашо мені риба без хвіст? нехай моя наймичка ззість!” *Новосільський А. “Люд український” 1857.*

9937. Що це—за жидову душу горить? *Бердичів.*

10260. Жив-жив-жив! *Номис М.* / Лають так горобців. Ніби як мучили Христа на хресті, Жиди подумали, що Він вже вмер и покинули мучить. Так горобець ніби прилетів и почав : “жив-жив-жив”, —вони знову стали мучить.

10397. Хто три роки служив у панів, а три роки у Жидів, того би лиш повісити. *Илькевич Г.С.*

10494. Нема торговиці без жидівського головиці. *Проскурів.*

10519. Жид каже “ти не знаєш, що купуєш” — и справді, Жид, замість доброго, дрантя продає. *Проскурів.*

10595. Оттак наші сіромахи Жидів обманюють : виніс сім мішків из погребя глини, та шашка й луп! *Словоди.*

10688. Жидівський попинач. *Куліш П. О.*

11234. Босини справляти (про босого). *Шейковський “Опыт южнорусского словаря” 1861*

11267. Витовчи ніс, бо вже було би убогому Жидові помастити віз. *Проскурів.*

11272. Такий чистий, як жидівський пантохвель. *Проскурів.*

11273. Так зателепався, як Жид. *Илькевич Г.С.*

11429. Поспіша, як Жид на шабаш (шабас. *Звенігородщина, Радомисль, Лубеничина ; шабаш. Брацлавичина? Бердичів, Київ, Лубеничина). Обочна Україна.*

11554. Випийте : казала Жидівка, що добра. *Пирятинщина.*

11624. Польске пиво (добре). *Переяслівщина.*

11660. Жид а винниця мати не дасть загигать. *Илькевич Г.С.*

11856. Розцілувався, як Жид на шабаші. *Єфименко П.С.*

11880. Забачимось на жидівського Юря. *Проскурів.*

12157. Лях співає, як істи хоче, а мужик жінку б'є, а Жид борухи відмовляє. *Брацлавичина?*

13457. Жиди, Жиди-Кателики, не нашої віри : у середу у п'ятницю сироватку їли. *Білгородщина?*

13458. Жид, пан и Німець усе поверне в нівець. *Черніговщина.*

13459. Жид-Жид, бодай ти зник! *Валки.*

13460. Ні жидівського духу не відхристиш. *Валки.*

13514. Взяв, як чорт Жида. *Київ.*

13809. Од его як од Жида правди. *Коховський В.П.*

13829. Такий вірний, як лічба жидівська : писне мов би то й раз, а перелічиш, так все два або й три. *Стороженко Д.Д.*

13860. Припадає, як Жиду короста. *Глухівщина.*

13913. Як Жид убогий, свиня худа, жінка п'яна — нема гірше. *Коховський В.П.*

14044. Ого жарку! можно й Жида зпекти. *Білгородщина?*

14051. В тебе служити, мов у Жида. *Валки.* / Жид наймав наймичку : “Ти з мене”, каже, “галоцько, не багацько бери — в мене не багацько діла”. — “Як так?” — “От бац : встань ранком, підмети хати — та й сядь, винеси сміття—та й сядь ; подій коров—та й сядь” —та й сядь, та й сядь, и ліку нема. “А як уже зробиш, що казав — обідати... Страва для тебе буде хороша : чи звариш контопки — юшка твоя, раки — юшка твоя, яйця — юшка твоя... А що ж мало, сцо три переміни на обід? дез більш готувлять для батраків?”

注

1) Kubijovyc V., Markus V., “Jews,” Kubijovyc V., ed., *Encyclopedia of Ukraine*, v. 3, Toronto, 1988, pp. 385–386.

- 2) ポーランドとリトアニア大公国の合同を約した条約。これにより「レーチ・ポスポリータ」(ポーランド語で Rzeczpospolita, ロシア語で Речь Посполита, いずれも「共和国 республика」の意味)が誕生した。参照: 井内敏夫「ルブリンの合同」『東欧を知る事典』平凡社, 1993年, 570-571ページ。
- 3) Брокгаузъ Ф. А., Ефронъ И. А., изд., *Россия: Энциклопедический словарь*, Л., 1991, с. 86.
- 4) ウクライナの小村。イディッシュ語では「シュテットル」。
- 5) Субтельний О., *Україна: історія*, К., 1993, с. 344.
- 6) Kubijovyc V., Markus V., *op. cit.*, p. 390.
- 7) 本稿でいうユダヤ人とは, アシュケナージ(ドイツ・ポーランド・ロシア系ユダヤ人)を指す。なお, 原文ではユダヤ人の一般の呼称「イエヴレイ еврей」ではなく, 専らその蔑称「ジッドжид」が使われているが, 単に「ユダヤ人」と表記した。括弧中の数字は通し番号を示している。詳細は「資料」に示した原文を参照されたい。
- 8) 復刻版: Номис М., *Українські приказки, прислів'я і таке інше. Збірники О. В. Марковича та інших. Уклад М. Номис*, К., 1993. 初版: Номис М., *Українські приказки, прислів'я и таке инше. Збірники О. В. Марковича и других. Спорудив М. Номис*, СПб., 1864.
- 9) 近藤俊介「ノミスの『ウクライナ諺集』におけるロシア人」『国際開発研究フォーラム』13, 1999年, 147-158ページ。
- 10) 彼は19世紀ウクライナの政治的秘密結社「キリル・メトディウス団」に関わっていたが, ペンネームのおかげで逮捕を免れたという。なお, この秘密結社については次の文献を参照: 川端香男里ほか編『ロシア・ソ連を知る事典』平凡社, 1993年, 152ページ。
- 11) 詳細は添付した資料を参照。なお, イタリック体の文字は人名, 書名, 地名などの出典を, “?” は出典が不詳であることを示す。出典と異文の表記法は論者の判断で簡略化した。検閲により初版から削除されたものについては[検閲削除]と表記した。
- 12) 上田和夫『ユダヤ人』講談社現代新書, 1986年, 15-16ページ。
- 13) Субтельний О., *Там же*, с. 345.
- 14) 高尾千津子「ロシアのユダヤ人」山内昌之編『スラブの民族』弘文堂, 1995年, 177-178ページ。
- 15) 『申命記』(14:3-21) および『レビ記』(11:1-47) 参照。
- 16) *Большой энциклопедический словарь*, 2-е изд. (1998) М., 1998.
- 17) Kubijovyc V., Markus V., *op. cit.*, pp. 386-387.
- 18) Брокгаузъ Ф. А., Ефронъ И. А., *Там же*, с. 170.
- 19) 原文では「カハール」(=ユダヤ人共同体)となっているが, 「シナゴグ」と解釈するのが適当ではないかと思われる。なおイディッシュの民話によれば, シナゴグには夜になると霊が群れ集まり, そこに寝泊まりする者に様々な悪戯をすると信じられており, 乞食でさえそこでは夜を明かしたがいらないという(ヴァインライヒ・ビアトリス, 泰剛平訳『イディッシュの民話』青土社, 1995年, 376-378ページ)。実際に, ルーマニアのヤッシーのシナゴグでは, 一人眠り込んでしまいシナゴグに残された男が, 夜に大勢の白装束の者たちが音楽に合わせて踊るのを目撃した, との言い伝えがある(同書, 400ページ)。
- 20) Olson J. S. ed., *An Ethnohistorical Dictionary of the Russian and Soviet Empires*, Westport-London, 1994, p. 320. および Мышь М., “Мотивы особых законовъ о евреяхъ,” Брокгаузъ Ф. А., Ефронъ И. А. изд., *Энциклопедический словарь*, т. 11, СПб., 1893, с. 455.
- 21) 栗原成郎『スラブのことわざ』ナウカ, 1989年, 34-37ページ。
- 22) Hryniuk S., “Propination,” Struk D. H. ed., *Encyclopedia of Ukraine*, v. 4, Toronto, 1993, pp. 240-241.
- 23) 例えば『ノミス諺集』次の項目を参照: 873, 881, 882, 5553.
- 24) 井内敏夫「シュラフタ共和政とポーランドのお国柄」原輝之編『スラブの歴史』(講座スラブの世界 3) 弘文堂, 1995年, 113ページ。

- 25) Субтельний О., *Там же*, с. 345.
- 26) この定住地域は, “черта еврейской оседлости” という独特な用語で言い表される。その範囲はウクライナ, ポーランド王国, リトアニア, ベロルシア, ベッサラビア, クルランド (ラトビア) におよんだ。なお, この用語の訳し方に関しては, 次を参照: 黒川知文『ロシア社会とユダヤ人 1881年ポグロムを中心に』ヨルダン社, 1996年, 135ページ, 注3。
- 27) Субтельний О., *Там же*.
- 28) その他にも, 学業など特別な場合にも居住地からの外出が許されていた。Мышь М., “Временное пребывание вне черты еврейской оседлости,” *Там же*, с. 458–459.
- 29) Kliger H., “Judaism,” *International Encyclopedia of Communications*, v. 2, N. Y., Oxford, 1989, pp. 372–376.
- 30) ウクライナの定期市に関しては次を参照: Грушевський М. С., *Історія України-Руси*, т. 6, К., 1995, с. 92–108.
- 31) 『マタイ福音書』(2: 16~18) 参照。イエスの誕生を知って恐れ感ったヘロデは, ベツレヘムとその周辺の2歳以下の男の子を一人残らず殺させた。
- 32) ダーリの『ロシア諺集』には類似表現「ユダヤ人が豚の耳を食べた。Жид свиное ухо съел。」が収められている。参照: Даль В. И., *Пословицы, поговорки и прибаутки русского народа*, т. 1, СПб., 1997, с. 287.
- 33) ダーリの諺集には次のような関連表現が見られる: 「奴はネギ臭い, ニンニク臭い (ユダヤ人だ)。От него цибулькою, чесноком пахнет (он из жидов).」 *Там же*.
- 34) Гринченко Б., *Словарь Української мови*. В 4-х т., К., 1996–7.
- 35) 黒川知文はチェーホフの作品における同様のユダヤ人像について触れている (前掲書, 169ページ)。該当部分の原文と出典は次の通り: 「息苦しいほどニンニクの匂いがした пахло чесноком до духоты」 (Чехов А. П., “Скрипка Родильда,” *ПССиП*, т. 8, М., 1985, с. 297), 「にんにく野郎Чеснок」 (*Там же*, с. 302), 「疥癬病みどもには参った! Життя нет от пархатых!」 (*Там же*, с. 302)
- 36) 1648年, ポフダン・フメリニツキー (1595–1657) の指導のもとで行われた, ウクライナ・コサックによる対ポーランド独立戦争。
- 37) トルコ語で「襲撃者」の意味。右岸ウクライナで起きた, 民衆とコサックによる対ポーランド民族解放闘争のこと。
- 38) ウクライナ語で「一揆」の意味。ここではイワン・ゴンタやザリズニャクらが英雄的に活躍した。その様子はウクライナの詩人シェフチェンコ (1814–1861) の叙事詩『ハイダマキ』(1841) に描かれている。詳細は次の邦訳を参照: 渋谷定輔, 村井隆之訳「ガイダマキ」『シェフチェンコ詩集』れんが書房新社, 1988年, 35–200ページ。
- 39) ロシア語で「破壊, 迫害」を意味するが, 特にユダヤ人迫害のことを指す用語である。ポグロムに関しては, 黒川の前掲書のほかにも次を参照: 中谷昌弘「1881年ポグロム後の帝政ロシアのユダヤ人問題に関する一考察 — 『ユダヤ人に関する臨時条例』を中心に」『ロシア史研究』61, 1997年, 2–12ページ。
- 40) Ohloblyn O., “Rigelman, Aleksandr,” Struk D. H. ed., *Encyclopedia of Ukraine*, v. 4, Toronto, 1993, p. 372.
- 41) Рігельман О. І., *Літописна оповідь про Малу Росію та її народ і козаків узагалі*, К., 1994, с. 155, 158.
- 42) このほかにも, 本稿作成のために次の文献を参照した。石川栄吉他編『文化人類学事典』弘文堂, 1987年。梅棹忠夫監修『世界民族問題事典』平凡社, 1995年。山折哲雄監修『世界宗教大事典』平凡社, 1991年。伊東孝之, 井内敏夫, 中井和夫編『ポーランド・バルト・ウクライナ史』(新版世界各国史20) 山川出版社, 1998年。